

---

# 私の夢

なめねこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の夢

### 【Nコード】

N6703D

### 【作者名】

なめねこ

### 【あらすじ】

泣けるかわからないけど皆さん読んでください。

## 理由（前書き）

これは90%実話です。

## 理由

私の名前は中屋<sup>なかや</sup>香織<sup>かおり</sup>

私は昔からナースになることを決めていました。

なぜナースになろうと思ったかというと、あれは私が小学5年生の  
ときのことです。

その当時、私はバスケットが大好きでバスケット少年団に入っていました。

恥ずかしい話、このときの私の夢はバスケット選手になることでした。

私は毎日のようにバスケットをしました。

上手くはありませんでしたが楽しくて夜遅くまでやっていました・・・  
・・・あの日の夜も

私は練習が終わった後に自主練習をしていました。

そして1時間程練習をしていると監督に

「おい、そろそろ終わりにしろー」

つと言われたので練習を終えて家に電話をしてむかえに来てもらうことにしました。

しかしなかなか電話に出てくれなく、諦めかけたときにやっと電話がつながりました。

電話に出たのはおばあちゃんです。親はまだ仕事から帰って来ていないようでした。

私は早く帰りたいだったのでおばあちゃんにむかえに来てもらうことにしました。

おばあちゃんは5分程でむかえに来てくれました。私はもう少しかかるとおもい近くのコンビニに行ってしまいました。

私はおばあちゃんがむかえにきていることを友達からきき急いで戻りました。

そして私はおばあちゃんの車に乗り謝りました。

おばあちゃんは笑って許してくれました。

家に着くと私は着替えをすまし休んでいました。

おばあちゃんはおじいちゃんがお風呂に入っていることに気付き様子を見に行きました。

するとおばあちゃんは突然悲鳴をあげて私を呼びました。

風呂場についた私はおばあちゃんがおじいちゃんをお風呂から出しているのを見ました。

最初はのぼせたのかと思っていたがおばあちゃんは

「早く救急車呼んで!!」

と大声で言ってきたので私は半泣きで救急車を呼びました。

その後救急車がくるまで私はおじいちゃんを揺すったり声をかけましたが反応はなく、おばあちゃんは心臓マッサージをするが上手くいかず時間だけがむなくすぎていきました。

救急車が来たと同時に親も帰ってきて、一緒に救急車に乗って行ってしまいました。

私は留守番をするよう頼まれました。

そしておじいちゃんが帰って来ることを祈りました。

ずっと

ずっと

すると突然電話が鳴った。

出てみると母からでした。母は

「おじいちゃん……やっぱりだめだったみたい……心臓発作で……医師は……もう少し発見が早ければ……おじいちゃん……」

母は泣くのをこらえながら私に言ってくれた。

私は電話を切るとそのまま部屋に行きベットに横になった。

全て夢だった。そうなることを祈った。

そうならないことはわかっていても頭がついていかない。もし自主練習なんかしなければ……

もしコンビ二なんかに行かなければ……

もしバスケなんかしないでいれば……

おじいちゃんは死なずにすんだ

そう考えると涙がとまらなかった。

私はそのまま眠りについた。

次の日、目が覚めると私は急いでおじいちゃんの部屋に行った。

いるはずなのに、  
それでも昨日の祈りが神様に通じたかもしれないと思いドアを開けた。

しかしそこにはおじいちゃんの姿はなく、おばあちゃんが抜け殻のように座っていた。

私はおばあちゃんに泣きながら謝った。



私が早く家に帰っていればおじいちゃんは大変にすんだ……

おばあちゃんは昨日くるまでみせた顔と同じ顔で私を許してくれた。

でも昨日とちがって今日は目から涙がでているようなきがした。

私はこのときからバスケット選手から看護師になることを決めました。

## 想い

あれから何十年たっただろうか。

私は今ではもうあの時のことに苦しむことはなくなりました。  
しかしたまに思い出したりもしてしまいます。

でも悲しんだりはしません。

悲しんだらおばあちゃんを不安にさせるかもしれない。

おじいちゃんに叱られるかもしれない。

だから私は看護師になっておじいちゃんに

「あの時はごめんなさい。

おじいちゃん、助けられなかったけどおばあちゃんは助けてみせる  
から見えてね」

と言いたい。

おばあちゃんは今の頃元気がないように見える。

もしかしたら私のことを恨んでいるのかもしれない。

でも私はおばあちゃんを助けて見せる。そつ神様に誓った。

私は明日から看護師として病院で働きます。

地元の小さい病院ではありますが夢をかなえることができました。  
私は仏壇でおいちゃんに報告をしました。

飾ってある写真はとても笑顔でいつも元気をもらいました。

そして次の日私は病院にいきました。

仕事初日はさすがに大変でした。

いろんな患者さんがいて正直続けられるか不安でした。

でも仏壇でおじいちゃんの顔を見るとそんな不安もなくなり元気になりました。

病院の仕事にもなれ、楽しみを覚えながら何ヶ月もたったときそれは突然起きた。

おばあちゃんが突然気を失って倒れた。

私はその日はたまたま休みで友達と遊んでいました。

母からの電話に私は驚きました。  
そしてすぐに病院に駆け付けました。

病室についた私はドアを勢いよくあけて中に入りました。

おばあちゃんはベッドに横になっていました。

私は絶望しました。

そしておばあちゃんに近付き泣きそうになりましたがおばあちゃんは……寝ているだけでした。

私は落ち着いて周りを見ました。すると母は笑いながら

「大丈夫よ。ただ疲れてただけだから、医師もたぶん過労だろうって言うってたし。2、3日で退院できるって」

私はその言葉を聞いて安心しました。

それから毎日のように私はおばあちゃんの部屋に行った。

しかしおばあちゃんはいつもつらそうな顔をしていました。

私は最初、すぐくつかれていたんだと思っていたけど何日たってもつらい顔はとれることはありませんでした。

おばあちゃんに話し掛けても

「ああ」とか

「そうか」とかしか言ってくれず、時には無視しているのか、なにも話してくれないときもありました。

私はもしかしてあの時のことをまだ怒っているのだと思いました。

いや、そうとしか思えない。

なぜならあれ以来私はおばあちゃんの笑顔を見たことがないからで

ある。

おじいちゃんが死んでから私はおばあちゃんの部屋を覗きに行つたことがあるがおばあちゃんはノートみたいな物を手に持ちながら泣いていた姿を何度も見たことがあるからである。

私はおばあちゃんの病室にいたことがつらくなり、会いに行くことが減ってしまった。

そんなある日私は妙な胸騒ぎがしました。

しかしそれが何なのかはわかりませんでした。

そして数時間後なにやら騒がしいことに気付きました。

私は仲のよかった同僚に何があったの聞いてみました。

同僚は私を見た瞬間驚いた顔をしていました。

そして口を震わせながら言いました。

「あ、あなたのおばあちゃんが突然苦しみだして意識不明だったって・・・」

私は同僚が話し終わる前に急いで病室に向かいました。



病室には医師がいました。

しかしなぜかここだけ時間がとまっているかのように誰も動いていませんでした。

そしておばあちゃんの顔には白い布が掛けられていました。

「さっきの胸騒ぎは……おばあちゃん……だったの?」

私は……なんのために看護師になったのだろう

おばあちゃんが近くにいながら私はなにもできなかった。

私はおばあちゃんのためになにもしてあげられなかった。

そして私は泣き続けた。

布をとるとおばあちゃんはいつもの眠っている顔をしていました。

私はおばあちゃんの優しさを忘れていました。

おばあちゃんはどうなときも優しくしてくれました。

優しく許してくれました。

私はその日一日おばあちゃんの病室にすることにしました。

おばあちゃんの手は冷たくなってしまいました。

私は涙や鼻水が止まらずちり紙でふこうとしたが無いことに気付きました。

あちこち探していると引き出しの中にノートが2冊あることに気付きました。

一冊はボロボロのノートでもう一冊は真新しいノートでした。

表紙には日記とかかれていました。

私はボロボロのノートを手に取りました。

そのノートは見覚えのあるノートでした。

そう。それは昔おばあちゃんが泣きながら持っていたノートでした。

私は中身を見てみました。

それはおじいちゃんが書いたものでした。

19xx年 7月10日

今日も香織は夜遅くに帰って来た。

少し疲れてるようだったがいつものように肩を揉んでくれた。

本当にいい子だ。

19xx年 7月11日

今日も香織は夜遅くに帰って来た。

いつもの笑顔で肩を揉んでくれた。

バスケット選手になると言っていた。

香織ならなれるだろう。

わしがかんばれと言ったら笑顔で頑張ると言ってくれた。  
本当にいい子だ。

19xx年

7月25日

今日はずいぶんと帰るのが遅い。

ばあさんがついさっき香織をむかえに行った。

バスケット選手になりたいと言ったあの日から毎日帰るのが遅くなった。

よく頑張る子だ。

バスケット選手になった香織の姿が見てみたい。

これからどんなに辛いことがあっても続けて欲しい。

これ以降は白紙だった。

私はおじいちゃんがこんなに応援してくれていたのに気付くことが

できなかった。

おじいちゃんに会いたい。

会って謝りたい。

おじいちゃんはいつも私のことを考えてくれていたのに私は・・・  
・・・私はなにもしてあげられなかった。

私は泣き続けた。

そして気付いた。なぜこんなにノートがボロボロなのかを。



きつとおばあちゃんはおじいちゃんの日記を見つけ、ボロボロになるまで読み続けたんだと思う。

私はなんとか落ち着きを取り戻し、次の日記を手に取りました。

開くとそれはおばあちゃんが書いた物でした。

19xx年

7月26日

朝、目が覚めた。やはりおじいさんはいなかった。

香織が泣きながら謝っていた。香織は悪くないのに……

大丈夫だよって言ったら香織は泣きながら笑ってありがとって言った。

本当に優しい子だ。

19xx年 7月26日

香織がバスケットをやめてしまった。

元氣も無くなったようにみえる。

元氣になってほしい。

19xx年 7月27日

おじいさんの日記を見つけた。

おじいさんに申し訳ない。

香織にバスケットをやらないのか聞いてみた。

香織は看護師になるといった。

おじいさん……すみません。でも香織が決めたことだから応援します。

200×年

5月13日

体が重く上手く動かない。

でも香織の姿をみれば幸せである。

200×年

5月14日

香織が話し掛けてくれた。

でも、もう上手くしゃべることすらできない。

200×年

5月15日

看護師さんが私はもうながくないといっていた。

香織は知っているのだろうか。

香織に会いたいけどこの頃会いに来る回数が減った。

頑張っているんだろう。

200×年      5月16日

もう    てがうごかなくなってきた。

につきはもうかけないだろう。

さいごにかおりにあいたい。

ありがとうといいたい。

かおり・・・・・・・・がんばって。



私は泣いた。泣き続けた。

おばあちゃんは私のことですつと悩んでいたのに私は最期まで気付いてあげられなかった。

おばあちゃん………ありがとう。

私、おばあちゃんになにもしてあげられなかったけど、おばあちゃんのこと大好きだったよ。

おばあちゃん、おじいちゃん、今までありがとう・・・  
私、どんなに辛いことがあっても頑張るから、  
見ててね。

ありがとう



完

## 想い（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。まだおじいちゃん、おばあちゃんがいる人はまだ間に合うのでどんどん話し掛けて下さい。ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6703d/>

---

私の夢

2010年12月2日01時45分発行